

第一一話

保昌謀略齋明被誅事

『前太平記』上 卷第二 三十四頁から三十七頁より

[朝廷賊徒の討伐を決す]

こうしてその夜もすっかり明けて、雑人・下部は皆衣服を剥ぎ取られ、裸で京都

斯くて其夜も明け離れて、

に逃げ帰り、「保輔と齋明の仕業で、このような酷い目にあつた」と、自分の恥を理解せず大騒ぎして言う。関白頼忠はこの次第をお聞きになり、「気に入らない奴

「憎き奴原かな。

どもだなあ。もしそのままにしておくならばどのようなことをしでかすだろうか。

其儘に閣かば何なる事を為んずらん。

武士に命じて討伐するのが当然だ」とおっしゃったところに、左衛門尉保昌が急い

武士に課せて誅殺有るべし」

で参上して、「さてこの度の無法者を何者だと考えてみますと、確かに保昌の同胞

「さても今度の溢れ者を、何者ぞと存じて候へば、正しき保昌が氏族にて候由。

でございます次第。前々から多くの人々の期待に背いた者たちでございますため

かねて人望に背きし者共にて候故、

に、過ぎ去った頃から排斥してその居所も分からなくなりましたが、このような異

去んぬる比より擯斥して、

其在所をも知らず候ひしが、

斯かる奇異の

常な振る舞い、天誅を下すのに躊躇いもない愚か者。どうか、今回の追っ手の御使

振舞ひ、

天誅憚らざる嗚呼の者。

願はくは、

今度討手も御使を

者を保昌にもし命じてくだされば、地に穴を掘ってでも探し出し、捕らえ参上する

保昌に下し賜らば、

地を穿つても尋ね出だし、

搦め参すべきにて候」

意向でございます」と願ったところ、すぐに相国(老)の承諾があり、京にいる武士四百騎余りを伴われ、依然として奴らの行方がはっきりしていなかったので、国々に広くお知らせになり、お捕らえ申し上げるべき次第を命令される。

【保昌齋明を攻む】

まもなく保昌は、敵は近江にいると聞いて、すぐに軍兵を指揮して高島に押し寄せ、二日二晩攻めたのだった。城は防御の要が山の難所にあるため、潜んでいる兵

城は防ぎ場切所なるに、

籠もりたる兵共

たちは、皆いつも山野を住まいとし、昼は行き来する人を追い、物を奪い取り、夜

皆平生山野を家とし、

は家々に無理矢理入り込み、人を傷つけ財産を奪う。昼夜体を鍛えた賊徒どもであるで、息をつぐこともなく攻めるが、まったくうんざりする様子もなく、味方（保

更に退屈の体も無く、

昌の軍）は大方京都の武士であるので、心構えは激しく勇み立つように思えるが、

意は矢長に思へ共、

心身は疲労して自然とてきぱきと動くことが出来ない。保昌はこの有様を見て、

身心は勞れて自づから墓々しくも働き得ず。

「もしこのままで攻めるならば、味方の兵たちは気疲れして、敵に勢いを圧倒されるだろう。今回の大将は、私が乞いて自ら出向き赴いた甲斐もなく、これほどの小さな城に無駄に数日を送るようなことこそ残念である。計略をもってすぐさま攻め

徒に数日を送らん事こそ遺恨なれ。

落とそう」と言って、文書をしたためて上差し^(貳)を鎗^(參)に結び付けて、城中に矢を放ち入れた。賊徒たちはこれを取って、急いで大将の斎明に見せたところ、保昌の筆跡である。斎明は疑わしく思っ読んでみると、書面に述べられている

保昌が手跡なり。

ことには、

天子の命令を辞退することを出来ず、この戦場に直面する。武家の慣習は、どうにもならないか。さて、城中の兵は強く、攻める軍（保昌の軍）は勝機をなくしたことの旨は上聞に伝わり、急に大軍を奮い立たせ、源氏の一派が、今朝出陣したとの情報があった。かりにもそなたが猛々しく猛威を振るい、城を守護させるといっても、多勢をもって城を囲まれるならば、すぐさま兵は疲れ矢はなくなって、敗北となるろうか。少ない人数は実に多くの人に敵うことが出来ず、小さなものは実には大きなものに敵うことが出来ない、このいわれか。そればかりでなく、兵を国々に派遣なさり、往来を邪魔するようならば、網の中の魚のように、籠の中の鳥のように外へ出られる所はないだろう。もはや畿内すべて、及び伊賀伊勢若狭越前などの国々、すべて役所の命令文書を賜り、しかもその国を守っている。ここから東はまだ兵は置いていない。早くこの砦を去って他国に向かい、生を全うして後の栄華を待つには及ばないだろう。保昌は今この攻めかかる所にいるといっても、叔父と甥の慈愛、どうしてこれを忘れることがあるだろうか、いや忘れることはしない。とても嘆くに我慢出来ない。申し上げるべきことなど多いといっても、（今は）急いでいる時、詳しい事情は（いうことが）出来ない。どうかどうか。

四月二十九日

左衛門尉保昌

進上

前任の右兵衛尉（斎明のこと）殿

<原文>

詔明不得辞、而臨此戰場。弓箭之習、誠無是非所乎。抑城中兵彊、寄手失勝利之旨達上聞、俄爾に起大軍、源家の輩、今朝出陣之由有其聞。縦貴辺振猛威、而雖令主禦之、以多勢困之者、忽兵疲矢尽、而及敗北乎。寡固不可敵於衆、小固不可敵於大、此之謂乎。加之、分遣軍兵於国々、差塞往反者、如網裏之魚、如籠中之鳥、而可無所於洩。既五畿内、並伊賀伊勢若狭越前等之国々、皆賜廳之下文、而守其国々。從此以東未置於兵。不如早去此寨而赴他邦、全生而俟榮。保昌今雖在此攻口、叔姪之愛、豈有忘之乎。頗不堪嗟嘆。可申送事等雖多之、急々之間、不能委細之義。頓首頓首。

四月二十九日

左衛門尉保昌

進上 前右兵衛尉殿

<書き下し文>

詔命辞することを得ず、此戰場に臨む。弓箭の習ひ、誠に是非無き処か。抑城中兵彊く、寄手勝利を失ふの旨上聞に達し、俄爾大軍を起し、源家の輩、今朝出陣の由其の聞こえ有り。縦貴辺猛威を振るひ、之を守禦せしむと雖も、多勢を以て之を困まば、忽ち兵疲れ矢尽きて、敗北に及ばんか。寡は固に衆に敵すべからず、小は固に大に敵すべからず、此の謂か。しかのみならず、軍兵を国々に分ち遣はし、往反を差し塞がば、網裏の魚の如く、籠中の鳥の如くにして、洩るるに所無かるべし。既に五畿内、並びに伊賀伊勢若狭越前等の国々、皆廳の下文を賜はり、而も其の国々を守る。此れより以東未だ兵を置かず。如かじ早く此の寨を去つて他邦に赴き、生を全ふして後榮を待たんには。保昌今此の攻口に在りえお雖も、叔姪の愛、豈之を忘るゝこと有らんや。頗る嗟嘆するに堪へず。申し送るべき事等之れ多しと雖も、急々の間、委細の義に能はず。頓首頓首。

四月二十九日

左衛門尉保昌

進上 前右兵衛尉殿

と書いてあった。斎明はよくよく見て、「どういう風にも、敵は新しい軍勢と入れ

「何様にも敵は、 新手を

替わって攻めてくるだろう。こちらには後方の助けはない。この頃少し（こちら

入れ替へて攻むべし。 御方は後攻の助けなし。 昨今聊か

が) 勝機に乗るといっても、関係ない計略ではない。敵が困んでこない内に、と

勝つに乗ると雖も、 遠き謀に非ず。 敵の取り巻かぬ先に、

にかく逃げておきたい」と思う心で出てきて、手下たちに向かって申し上げること

一先づ落ちて見ばや」

は、「私は思うところがあって、当分の間足跡を絶ち、世の変化を見たいと思うの

「某思ふ子細ありて、 少且つ跡を隠し、 世の変化をも見ばやと思ふなり。

だ。しかしながら、逃げていったと敵に知られるならば、きっと道を遮って制止し

但し、 落ち行きたりと敵に知られば、 一定路を遮って

ようとするだろう。私は二十町余りもきつと逃げおおせただろうと思う時、城に火

留めんずらん。 某、廿余町も落ち延びなんと思ふ時、 城に火を懸け、

を放ち、その光で一戦して、齋明も戦死したように見せるのだ。お前たちも準備し

其光にて一軍して、 齋明も討ち死にしたる様に敵に見すべし。 和殿等も相構へて、

ておいて、戦死するようなことはあつてはならない。一方を打ち破って逃げろ。敵

討ち死にする事有るべからず。 一方を打ち破つて落つべし。

は無理に打ち殺そうとするほどのことはすまいと思うのである。俺も美濃尾張の間

敵強ちに討ち留どめんとする程の事は、有るまじく思ふなり。 齋明も美濃尾張の間にて

で待ち合わそう。きつと後からやってこい」と合図を決め、その日が暮れるのを

待ち合はすべし。 必ず跡より来たるべし」

待っていた。攻め寄せる軍の大將保昌は、軍隊四百騎余りを、元のように前方が攻め入る場所を囲ませ、部下たちの中で斎明をよく見知っている兵は、八十人余りを上回って、敵の背後を離れること十七八町、もしくは二十二三町の間で、この田の畔のあの木陰に、五人三人ずつ伏兵を置き、一組に一人ずつ法螺貝を腰につけさせ、「それ（斎明のこと）以外の敵は殺せたら殺せ。斎明ともし分かったならば、

「自余の敵は落ちば落とせ。

斎明と見るならば、

合図に法螺を吹くがよい。その時、八十人余りの兵でいっぺんに攻め寄せ合って捕

合図に法螺を吹くべし。

其時

八十余人の兵、一度に寄せ合はせて虜るべし。

えよう。きっと、単身名高くなろうとして味方に知らせず、少ない人数で打ち取る

必ず

独り高名にせんとて、御方に知らせず、

小勢にて討ち

ことが出来ず取り逃がすならば、後日の罪は逃れることは出来ない」と厳しく申し

洩らさば、

後日の罪科逃るべからず」

上げ聞かせて、四月二十九日のまだ宵から兵を出したのだった。

【斎明死す】

そうとは夢にも思わないで、右兵衛尉斎明は、その夜の亥の刻ほどに信濃路へと目指し、手下二人を伴って城中を抜け出て、こっそり隠れていくほどに、案内でよ知っている道であるが、落ち武者の身となったので、木の陰、岩の隙間までも不安

木の陰岩の廉までも影護く、

で、こっそり歩いて進んでいく。ようやく十五六町落ち延びて、城の方を振り向いたところ、早くも火を放って敵味方の鬨の声、矢叫び^(肆)の音が騒がしい。これを見て聞いたのに加え、そうでなくても気後れし、ためらっていたのに、二人の手下がしっかり忠告して、再びすごすごと歩いていく。待機していた保昌の兵は、斎明と目にとめるより（早く）、合図の貝を吹いたところ、一瞬の間に八十人余りがぱっと集まり、（斎明を）真ん中に取り囲んで、縛り捕えようと騒ぎ立てた。斎明もさてはここまでの運命であると覚悟して、刀を抜き脇に寄せ、「ああ、おおげさな

「あな異々しの

敵の振舞いだなあ。さあ、さらば最後の戦をして、（我が首を）お前らの都の土産に

敵の挙動やな。 倡 さらば最後の一軍して、 汝等が都の裏に賜ん

くれてやろう」と言って、八十人余りを相手として、首を振ることもなく切って回

とて、 八十余人を引き受けて、 面も振らず切つて廻る。

る。文字通り闇夜の事であるので、太刀筋も見えないが、血気盛んな武士が左右に

如法の闇夜の事なれば、 打太刀すぢも見へざるに、 血気の勇者が死物狂ひ、

なぎ倒されたので、味方も多く討たれたのだった。やがて二人の手下たちも討死

弓手馬手に薙ぎ立つれば、 御方も多く討たれたり。

し、斎明もその身は鉄でも石でもないの、痛手を多く負って、目もまわり、手も

其身は鉄石にも有らねば、

痛手余多所に負ふて、

眼も眩き

手も

力が弱くなっていった、遂に縛り捕らわれた。保昌はたいそう喜び、夜が明けたな

緩まりて、

遂に搦め捕られけり。

らば連れてこいと言って、とある民家に入れて嚴重に警備させたが、ひどい重症に苦しめられ、次の日を待たずに息絶えた。すぐに首を切って、梟木^(伍)にさらし、さ

廳て首を斬つて

梟木に掛け、

らに残党を打ち絶やして、五月二日、都へ兵を引き挙げたのだった。

尚残党を討ち滅ぼして、

五月二日、

都に開陣したりけり。

注釈

※壺・宿紙……薄墨のすきがえしの紙。※壺・相国……大臣（太政大臣・左大臣・右大臣）の唐名。この時の太政大臣は藤原頼忠、左大臣は源雅信、右大臣は藤原兼家であると思われる。勘繰りがすぎるかと思うが、保昌が道長・頼通の家臣であったことから、兼家にも近い場所にいたと考えられるため、本文の相国は兼家のことを示しているかと考察する。

※式・上差し……箆やヤナグイ（矢を入れる容器）などに征矢（普通の矢）差し、その表側に差し添えた二本の矢。

※参・鏑……矢の先につける道具。木や鹿の角で、中を空洞にして、表面に数個穴を開け、射ると音がる。

※肆・矢叫び……戦いのはじめ、遠矢を射合う時に両軍が高く叫ぶ声。

※伍・梟木……曝し首をのせる木。

斎明が敗死しましたが、何度読んでもこの回の斎明の死にざまは格好いいです。

彼の辞世の言葉の訳はかなり気に入っているのですが、「さらば」をそのまま「さらば」と訳してしまったのは意識的すぎたかな……違和感があるようでしたらご指摘いただければと思います。

「面も振らず切つて廻る」という表現は、作中でも特に私が好きな表現の一つです。叔父の計略に引っかかるも腹をくくって最後の戦として刀を振るう斎明の姿は想像すると胸が詰まる思いがすると同時に、悪役であるにもかかわらずそんな勇ましさを見せてくれる彼に称賛の言葉を送りたくなります。

敗走する彼は少し情けなかったかもしれませんが……(笑)

ですが、今回斎明が部下を心配してみせたり、第7話で将門が睨みを利かせてみたり、第13話で伊賀兄弟に先陣をきったり、源氏称賛の側面の強い本作ではありますが、源氏と敵対する賊徒たちの出番を、読者に魅せる物語の構成は藤元元の文才を伺わせられますね。藤元元のキャラクターたちへの愛情や感情移入めいたものさえ感じます。

悪役たちが格好いいのも、この物語の特徴の一つと言えますかね。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/11/30

改訂：2021/3

海熊童子